

二十歳の助走①



世界を舞台に

活躍する人たちは、

「若き日」に何を学び、
何に挑戦したのか。



毎日新聞北米総局記者

白戸圭一

探検部の仲間と見た アフリカの「困難を生き抜く力」

——アフリカに関心を持たれたきっかけを教えてください。

白戸 最初の出会いは大学二回生のとき、探検部の仲間と出かけた西アフリカのニジェールです。そこは日本では経験したことのないような「非日常」にあふれた世界でした。常にたくさんの方が亡くなり、難民は何千万という単位で大陸にあふれかえっている。電気など通っていないところが多い。そういう「非日常」では、私たちがふだん見られないような人間の「本性」がさらされます。「生きる

ための力」とでも言ったらよいでしょうか。当時二〇歳そこそこだった私は、その「力」に強烈な印象を受けました。

——その後、大学院に入学し、南アフリカ共和国のヨハネスブルクでフィールドワークもされています。

白戸 南アフリカ激動のときでした。一九九三年に大学院に入学し、翌九四年に南アで初めて全人種参加の総選挙が行われ、アパルトヘイトが完全に撤廃されました。この変革を、市民社会、特にNGOの役割に注目して分析すると

というのが私の研究テーマです。日本でNGOが広く認知されるようになったのは阪神淡路大震災以降だと思いますが、南アフリカでは、私が日常的に関わっていたスラムの人々にまで浸透していたのが印象的でした。

ヨハネスブルクには、約七カ月滞在し、フィールドワークも兼ねて、日本国際ボランティアセンター(JVC)での活動にも参加させていただきました。南アフリカ駐在の初代ボランティアです。上司一名と二人での活動ですね。——どのような活動をされたのですか。

白戸 首都プレトリアの郊外にあるスコッターキャンプ(スラムのようなもの)の開発プロジェクトを任せられました。貧困地区に毎日通い、現地の人たちとプロジェクトの進め方について話し合いました。こちらは二三歳そこそこの若造ですから、だいぶなめられましたが(笑)。

そこでいろいろなことを学びました。衝撃的な出来事もたくさんあります。ある朝起きたら、自分の宿泊した小屋の前に血まみれの死体が遺棄されていたなんてこともありました。私と一緒に活動しているコミュニティのことを、快く思っていない人たちによる嫌がらせだということは、ピンとききました。人間が集まって働くことは難しい。その大変さが、骨身に染みしました。

——重い経験ですね。その後の仕事との関連ではいかがですか。

白戸 論文を作成する上で、またジャーナリストとして働く上で、一次資料の重要性を痛感しました。社会のなかで本当は何が起きているのか、やはり他人が書いた書物、論文、新聞記事だけではわかりません。当事者の声、当事者の持っている資料や文献にアプローチしたいという思いは、後に新聞記者という道を選択する上で大きな影響を与えたと思います。

新米記者の二正面作戦

——研究者ではなくジャーナリストの道を選ばれました。

白戸 何かを調べてものを書きたいという思いが強かったです。学者になるか、ジャーナリストになるか、だいぶ迷いました。最終的に、自分の適性というものを考えたときに、文献を中心に情報を収集する研究者になるよりも、現場に自ら足を運び、生の声に触れながら物事を考察するジャーナリストが向いているのではないかと考えるに至りました。

試験を受けた新聞社のなかで二社から内定をいただいたのですが、アフリカに支局を置いていた毎日新聞に入社し

ました。

——特派員として海外に出られるまで、どのような仕事をされていたのですか。

白戸 日本国内で社会部担当の記者を経験しました。働き始めて直面する矛盾というのはいくつかあると思いますが、最大の問題は、どのようにすれば希望の部署に配属されるかということでした。新聞社に限ったことではありませんが、何千人もの人間が働いている組織で、自分のやりたい仕事ができる可能性は大きくありません。誰かに取り入ってコネを使うのも嫌ですから、その時々部署で実績を上げて認めてもらおうしかない。すると今度は、「社会部が向いてるじゃないか」となってしまうて(笑)。

二〇歳代が終わる頃、恩師に相談に行きました。そこでいただいたアドバイスが、「二正面作戦をとったらどうだ」。つまり会社の仕事をそれなりにこなしつつ、並行して自分を磨く努力をせよということです。会社を辞めてもすぐに大学院に戻るような努力、つまり本を読んだり論文を書いたりということです。平日は仕事をして、休日は勉強。いまから振り返ると、一番辛い時期でした。

——幸いにして、外信部に異動されました。

白戸 入社八年目で外信部というのは、異例の早さでした。人事は玉突きですから、どこか一つ狂えば、違った結果になったでしょう。いろんな偶然が重なった結果で、人知を超越した「運」としか言いようがないですね。

よき仲介者をつかまえる

——二〇〇四年からヨハネスブルクに赴任されます。記者としてどのように情報を収集されましたか。

白戸 まずはアフリカのメディアをウォッチします。一つの支局でサハラ以南の四八カ国をカバーするので、網羅的というわけにはいきません。ヨハネスブルク地元紙「スター(Star)」は毎日目を通しました。南アフリカについて情報量が豊富なのは「南ア通信(South Africa Press Association: SAPA)」、アフリカ全般について把握するために、旧宗主国でもあるイギリスのロイターやフランスのAFPの情報量が圧倒的です。それと「ALL AFRICA COM」というアフリカ各地の地元紙を集めたホームページがあり、これは重宝しました。

もう一つは自ら出かけての取材ですが、これは信頼できる人に口を利いてもらうのが基本です。そうでないと相手から信頼されにくく、リスクが高い。では、誰を仲介者と

するか。コンゴ民主共和国での取材では、展開している国連の平和維持活動（PKO）部隊にお世話になりました。PKO部隊と言うと日本では軍人で編成されているイメージですが、実際には膨大な数の文民が派遣されていて、彼らが四分五裂する現地の部族たちと緊密な人間関係を形成しているわけです。

また、地元の記者に紹介してもらうことも多々ありました。一度それをやると、そこから人脈が広がります。もちろんコーディネーターとして謝礼は支払います。そのつてを頼って、収監者から話を聞くために、手土産を持って足しげく刑務所に通ったこともありました。

——危険な取材もあったのではないですか。

白戸 その時でも情報をしつかり集めること、そしていざという時に「引く勇氣」を持つことが大切だと思います。また、危険な組織に接触するときには末端ではなくリーダーに接触するというのも、一つのコツです。末端のチンピラのほうが、なにかのきっかけでやられる可能性が高い。

——アフリカでの経験から感じられたことは。

白戸 日本人が持つ「アフリカ」イメージと実態との乖離が非常に気になります。「貧しい、かわいそう」といった

イメージは相手の尊厳にかかわる問題ですし、私が実際にアフリカで過ごして感じるのとは、むしろ閉塞感から抜け出せない日本と比べ、アフリカには開放感、元気さえあると思います。常に自分が持つイメージを更新していく姿勢が重要だと思います。



『日本人のためのアフリカ入門』
白戸圭一・著
ちくま新書、798円

白戸圭一

しらと けいいち

1970年生まれ。95年立命館大学大学院国際関係研究科修士課程修了。毎日新聞入社。鹿児島支局、福岡総局、外信部などを経て、2004～08年までヨハネスブルク支局長。11年4月より現職。著書に『ルボ資源大陸アフリカ』（日本ジャーナリスト会議賞受賞）、『日本人のためのアフリカ入門』がある。